

平成 27 年 11 月 22 日放送

呉北組 光蓮寺 百山純哉

十一月も下旬になり、富山県内の浄土真宗のお寺では報恩講がおわり、ご門徒の家々の報恩講が動まっている真っ最中ではないでしょうか。浄土真宗のお寺、ご門徒にとって一年で一番大切な行事「報恩講」は、親鸞聖人のご命日のお勤めです。

親鸞聖人がお亡くなりになられたのは、今から七百五十年ほど前、鎌倉時代の中頃、弘長二年十一月の二十八日です。親鸞聖人三十三回忌の時、本願寺の三代目のご門主である覚如上人が「報恩講私記」という書物をお書きになり、それ以来、ご命日のお勤めのことを報恩講と呼ぶようになりました。

報恩講といえば、精進料理のお齋を思い出される方も多いのではないのでしょうか。私のお寺では、お齋のためにと近所の門信徒のみなさんが一生懸命作ったお米や野菜を持ち寄り、報恩講の前日から、お寺の台所でお世話の方が準備してくださっています。

お齋の献立は、新米で炊いたご飯、シイタケ・ニンジン・ダイコン・サトイモ・がんもどきの煮物、昆布とゴボウで出汁とうま味を取ったおすましです。これらの献立は親鸞聖人の旅姿を表しているといわれ、一つ一つに意味があると言い伝えられています。

シイタケは聖人のかぶっておられた笠、がんもどきは袈裟、ゴボウは杖、ニンジンは手足のひび・あかぎれの血、サトイモは石。石というのは、聖人が関東におられた頃、各地へ布教に歩かれる道中、雪の降る夜に野宿で石を枕に休まれたという有名な言い伝えに出てくる石を表しているそうです。

親鸞聖人は、今から約八百五十年ほど前、平安時代の終わり頃、承安三年に京都の日野という所でお生まれになりました。九歳で出家得度され、比叡山で二十年間厳しい修行をされました。二十九歳の時、阿弥陀さまの願いを依りどころに教えを説かれた法然聖人と出遇われ、法然聖人のもとへ行かれました。ところが三十五歳の時、時の権力者によって法然聖人とともに流罪に遭われました。差別や争いが絶えなかった時代に「すべての人は平等である。すべてのいのちを等しく救いたい」と呼びかけられた阿弥陀さまの願いに生き、世俗の常識に流されず、権力に迎合することなく、正しいことを正しいと言われ、自ら厳しい生き方を選ばれました。報恩講のこの時期、親鸞聖人のご一生のご苦勞を偲び、私たちも聖人の歩まれた道を少しでもついでいきたいものです。

現代社会を省みますと、世界各地で争いが絶えません。国内においても、差別や貧困、環境、近隣諸国との関係、さまざまな問題があふれています。阿弥陀さまの願いに生き、浄土真宗の教えをいただく私たちは何を考え、どう行動していけばよいのでしょうか。

私たちは自分に被害がなければ、余所事、他人事で関係がないと考えてしまいがちですが、世の中の出来事はすべて関係し合っています。現代社会の諸問題もすべて、自分さえよければ、今さえよければという自己中心的なものの見方、考え方が作り上げたものです。

阿弥陀さまの願いは、すべてのいのちに対する願いです。「すべてのいのちを迷いの世界から救いたい、さとりの世界、浄土に生まれさせたい」と願っておられます。その願いに生きるということは、阿弥陀さまの真実の教えを聞き、すべての人が関係し合い、互いに生かされていることに目覚めていくことです。すべてのいのちは平等で尊いものとして認められ、お互いに支え合い、敬い合うものなのです。

けっして、来世の救いを説くことだけが仏教の教えではありません。今生きている私たちが、差別することもされることもなく、すべての人々が自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現をめざしていくことが仏教の本来の姿なのです。

私たちは他者、社会と関わりなく、自分一人で生きていける存在ではありません。そのことに気づかせてくれるのが、阿弥陀さまの願いであり、浄土真宗の教えなのです。

阿弥陀さまの願いに背いている現実から目をそらすことなく、「世のなか安穩なれ 仏法ひろまれ」と願われた親鸞聖人の生き方に学び、すべての人が差別したりされたり傷つけ合うことがなく、争いをすることがないよう、私たち一人一人が考え、行動していきたいものです。

解説

「報恩講」

親鸞聖人のご命日に勤められるお講

旧暦で十一月二十八日

新暦で一月十六日

このご命日のことを「御正忌」（ごしょうぎ）、「報恩講の御満座」（ごまんさん）と言います。

一般の寺院では、ご本山の御正忌の報恩講に先がけて勤められることから「お取越し」（おとりこし）などと呼ばれています。

「阿弥陀さまの願い」

仏説無量寿経のなかにある阿弥陀さまの願い

「ご本願」

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信楽して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずば、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。

すべてのいのちは平等である。すべてのいのちを迷いの世界から救いたい。さとりの世界、浄土に生まれさせたいという願い。

「世のなか安穏なれ 仏法ひろまれ」

親鸞聖人が晩年、京都から関東各地の門弟に出された手紙「御消息」のなかの言葉。

お念仏をいただく人は自身の往生だけを願うのではなく、仏法が広まることによって、世のなか安穏になってほしいという願いをもってほしい。